「名前のないゾウ」

高橋桐矢

広いサバンナに、名前のないゾウがいました。
昼間はひとりで草を食べながら歩き、夜はひとりでねむりました。
名前なんてなくても平気でした。
名前というのは、ほかの誰かが呼ぶときにいるものです。そのゾウを呼ぶものは誰もいなかったので、名前なんて必要ないのです。
おぼえているかぎり、ずっと昔からひとりでした。
でも、困ることは何もありません。
大きくて重いゾウがサバンナを歩くとドシン、ドシンと地面がゆれます。とてもりっぱな二本の牙は、するどくとがっています。長い鼻は、サバンナの一番高い木のてっぺんにもとどきます。
おいしい草の生えている場所も知っているし、どんな日照りのときにも枯れない川も知っています。
サバンナの動物たちにとって、水場はとても大切です。川の一番つめたくてきれいな

水を飲める場所が、ゾウの水場でした。のんびりしているように見えて怒りっぽいカバも、さわがしいシマウマも、すばやいハイエナも、ライオンだって、ゾウの水場には近付きません。

何にも困ったことはないし、名前をほしいと思ったこともありませんでした。

ある日、ゾウが高い木の枝に鼻を伸ばして、やわらかい葉っぱをちぎりとって食べていたときのことです。

サルのこどもたちが追いかけっこしながら遊んでいました。

赤毛の子ザルが高い枝にのぼりました。ほかのサルが追いかけます。高い枝の一番先に、赤毛の小ザルはかろうじてぶらさがっています。ここから落ちて地面に叩きつけられたら、いくらサルでもけがしてしまいます。

枝が大きくたわみました。赤毛の子ザルは、とうとう手を離してしまいました。

次の瞬間。

赤毛の子ザルは、ゾウの背中の上で、飛びはねていました。木の枝の下にちょうど、ゾウがいたのです。

追いかけていたサルたちもつぎつぎと、ゾウの背中に、飛びうつってきました。子ザルは、ゾウの足をつたってするすると地面におりたと思ったら、もう別の木にのぼって

います。
サルたちがいなくなってから、ゾウは、背中を鼻で、ぽりぽりとかきました。
「やれやれ、背中で追いかけっこか。わたしのことを木か石と同じだと思ってるな」
名前がないのは別にかまわないのです。
でも、ゾウはゾウで、木でも石でもないのです。
はしごではないし、踏み台でもないのです。
それから、赤毛の子ザルは、毎日のようにゾウのいるところにやってきました。
ゾウの足や鼻をはしごにして木にのぼり、背中を踏み台にして、木の実をとるのです。
ゾウは名前がないので、子ザルが呼びかけることもありません。
ゾウも、子ザルに話しかけたりしませんでした。
「木や石が、とつぜん、話しかけたらおどろくだろうからな」
とゾウは、思っていたのでした。
木や石だと、自分で思うぶんには、別に腹も立ちません。
でも同じことを人から言われたら、どうでしょうか。
サバンナには、遠くから旅をしてくる動物もいます。
二、三日前から、ライオンの姿を見かけていました。りっぱなたてがみの、若いオス

ライオンです。

その日、ゾウはいつもの水場で、水を飲んでいました。

川のほとんどは茶色くにごっていますが、そこだけは、透明でつめたい水がわきでてくるのです。

お腹いっぱい水を飲み、つぎは水のシャワーをあびようと、鼻に水をすいこんだとき、後ろで大きな声がしました。

「そこをどけ！」

ゾウがふりむくと、オスライオンがいました。オスライオンも、ここが一番いい水場だとわかったのでしょう。

ゾウは、耳をぱたぱたと動かしました。それから、ゆっくりあたりを見回しました。

水場をかこんで、動物たちが集まっていました。

シマウマもハイエナも、ゾウが水を飲んでいるので、いつものとおり、少しはなれて待っています。あの赤毛の子ザルもいます。

けれど、オスライオンは、ほかの動物たちにはかまわず、ゾウをまっすぐに見つめています。

ゾウはライオンに向き合いました。

「誰に言っているのだ。どけというからには名前をよんだらどうだ」
ゾウには名前がありません。だから、どくつもりもありませんでした。
けれど、ライオンは、ふんと鼻でわらいました。
「名前なんてあるのか？　石や木に名前があるのか。おまえなんて、おれさまの通る道をふさぐ石だ！」
大きな口をぐわりと開けて、空気がびりびりするほどの大声でライオンがほえました。
ゾウは、きばを、ライオンに向けました。するどく強く長いきばなら、ライオンを串ざしにするのも簡単です。大きな太い足で、ライオンをぺしゃんこにすることもできます。
そのとき足もとで声がしました。
「ライオン殺しのゾウ、っていう名前になっちゃうよ？」
いつのまにそばにきていたのか、赤毛の子ザルでした。ゾウは、ふむ、と考えました。
確かにその通りです。
まだ若いライオンは、本気を出したゾウがどれほど強いのか知らないのでしょう。
ライオン殺しのゾウ……、いかにも強そうです。ちょっとだけ心が動きましたが、やっぱりやめておくことにしました。

ゾウは、だまって、ライオンの横を通りました。ズシン、ズシンとひびく足音に、ライオンがびくりと体をふるわせました。

肩をいからせ、強がっていましたが、ライオンのしっぽは、足の間でふるえていました。

本気を出さなくてよかった、とゾウは思いました。

鼻に残った水を、空に向かってぴゅーっとふきだすと、空に虹がひろがりました。

翌日にはそのライオンを見かけませんでした。またどこかに旅に流れていったのでしょう。

平和な日々がもどったのです。

けれどそれもわずかな間でした。

日照りが続いていました。枯れることのない川があるので、飲み水には困りませんでしたが、ぎらぎらと熱い太陽の光が、草原の枯草に火をつけました。あっという間にサバンナは大火事になりました。

動物達は、先をあらそって逃げていきます。

ゾウも、早足で川に向かいました。

動物たちが歩いたり、泳いだりして川を渡っています。

いつもの水辺の透明な水が、どろどろの茶色になっていました。
大きなゾウは、川の一番深いところも歩いて進みました。カバはすいすい泳いでいるし、ヌーやシマウマも先をあらそうように川に飛びこんで泳いでいます。
けれど、小さな動物たちにとっては、そう簡単ではありません。
どんな日照りでも枯れないこの川は、その分大きく深く、流れも早いのです。
小さな動物達は、勝手にゾウの背中で一休みしていきました。
「今日のわたしは川のまんなかの石というわけだな」
ゾウはつぶやきました。
サバンナの向こう、遠くに黒いけむりが見えます。まだ逃げてくる動物がたくさんいます。赤毛の子ザルもまだ逃げていないはずです。
小さな動物達は、ゾウの背中で休んで元気を出して、また泳いでいきました。
ゾウは、進むのをやめました。
川の一番深いところで、流れされないよう足をしっかりふんばりました。
道に石があれば邪魔なだけですが、深くて広い川の真ん中に石の島があれば、小さな動物にとってはどれほど助かることでしょう。
小さなミーアキャットは川を半分泳いだところで、おぼれそうになりました。それで

も、必死に手足を動かしました。川の真ん中に黒い島があるのが見えたからです。そこまでたどりついて一息休むことができれば、きっと向こう岸に渡れるでしょう。
あともう少しで黒い島に手がとどく、という直前でミーアキャットはぶくぶくとしずんでいきました。
すると何かがミーアキャットをつまみあげ、黒い島に乗せました。
黒い島はゾウの背中でした。
ゾウが、おぼれそうな小さな動物達を鼻でつまみあげて、背中に乗せていたのです。
ゾウは思いました。
石は石でも、役に立つ石です。それなら悪くありません。
ゾウの背中に、サルたちも、つかまって休んで、また泳いでわたっていきました。
子ザルも、年よりのサルもいました。
けれど、あの赤毛の子ザルは来ませんでした。
ゾウはだんだんと心配になってきて、ついにはがまんできなくなって、背中で休んでいるサルに聞いてみました。
「赤毛の子ザルを知らないかね？　もうとうに逃げたんだろうか」
サルは、力なく首をふりました。

「赤毛の子は、まだ来ていないよ」
さっきより、けむりが近くなっていました。赤い炎も見えています。
川の水が増えてきていました。
ゾウは流されないように、いっそうしっかりと足をふんばりました。
とうとう水の上に見えるのは、背中と頭、それから鼻先だけになってしまいました。
顔も体も水の中です。
しだいに頭がもうろうとしてきましたが、その場を動こうとはしませんでした。
今もつぎからつぎへと、にげてくる小さな動物たちが、背中につかまっていくからです。
赤毛の子ザルがくるまで、しっかり立っていなければ。とゾウは自分に言い聞かせました。
それからどれくらいたったのでしょう。
背中の上に、赤毛の子ザルがひょいと乗りました。
「おそかったじゃないか」
赤毛の子ザルは、ゾウの背中を手でさすりました。
「やっと逃げてきたんだよ。それに必死で泳いだんだ。もうおぼれるかと思ったよ。こ

こにいてくれて本当によかった」
「石の島がね」
とゾウはこたえました。
すると子ザルは、目をぱちくりとさせました。
「石の島じゃないよ。あんたはゾウじゃないか」
ゾウは、困って鼻で背中をぽりぽりとかきました。
「ゾウはゾウだけど、わたしには名前はないんだ。だから、木や石のようなものさ」
子ザルが背中でとびはねました。
「あんたはゾウだよ！　ぼくを背中に乗せてくれたゾウはあんただけだよ！　あんたはどこにもいない、たったひとりの、本当のゾウだよ！」
キーキー声でさけぶだけではたりなかったのか、子ザルは、ゾウの大きな耳をもちあげて、呼びかけました。
「だから、あんたの名前は『ぼくの友達のゾウ』だよ！」
ゾウは返事をすることもわすれて、立ちつくしていました。
「聞いてる？　ぼくの友達のゾウ！」
「ああ、聞いてるよ。聞いている」

ゾウは、足をつよくふんばりました。
決して流されないよう、たおれないよう、強くかたい石の橋になって、小さな友達が、安全に川を渡れるように……。

サバンナの火事は、川のすぐそばの草までぜんぶ、黒こげにしてやっときえました。
動物達は、全員が川を渡って向こう岸に逃げることができました。
水かさの増えた川には、火事になる前にはなかった、黒い大きな石が、真ん中のあたりに、まるで石の橋のように、水面から見えています。
ゾウの背中のようなその石は、川を泳いで渡るとき、一休みするのにちょうどいい場所にあるのでした。
いつしか、その黒い石のことを誰ともなく、「友達の石」と呼ぶようになりました。
むかしその川のちかくに、名前のないゾウがすんでいたことは、もう誰もおぼえていません。

終り